

しかし、現在は、高齢化や世帯構成の変化から、住民を見守る体制や集える「場」を意図的に提供していかなければ、情報を把握することが難しくなっています。そのため、民生委員も地区社協が展開する（安否確認を兼ねた）給食サービスや、広報誌の発行、高齢者と小中学生との交流会などの活動に参加する機会が増えています。

それまで個別の相談・自立支援に軸足を置いていた民生委員活動が、最近では関係機関、特に地区社協事業への参加・協力が増えてきたことで、民生委員の役割や立場がわかりづらなものになっているといます。さらに、市民児協事務局も市社協にあるため、その活動が社協と民生委員どちらの活動なのかを線引きすることが難しいようです。

この点について、小柴さんは「民生委員と社協は全くの別団体です。協力し合うことは当然のことですが、守秘義務を課せられている民生委員が本来行うべきことは、やはり個別援助であり見守り活動です。その一助とするために、地区社協の活動へ積極的に参加するわけです」と、機会があるたびに皆さんへ話しています。

これは、民生委員側がその順序と線引きをきちんとしておかないと、住民からは社協協力員との違いもわからず、守秘義務をもとに相談してもらい、その相談に応じるといった、本来行うべき活動が疎かになってしまうことを懸念してのことです。

あれもこれも民生委員が行うのではなく、守秘義務のある民生委員だからこそできる活動について、まず考えていくことが必要なのかもしれません。

昔と今では、委員同士のつながりの持ち方も、少し変わってきているようです。

話をしやすい環境づくり

小柴さんが委嘱を受けた当時は、定例会が終わった後に必ずといっていいほど、みんなで飲み会を開き、胸襟を開いて、いろいろな話をしたようです。

それまで知らなかった地域のことや民生委員活動のこと、委員間のことなど、多くのことを学ぶ場でもありました。こうした場が、お互い気軽に話す

ことができ、地区民児協にすんなりとなじめる環境づくりにひと役買っていたようです。

小柴さんは、活動しやすい環境づくりに取り組むには、性格が合う合わないは別にして、話す機会を持ち、顔をあわせて会話すること、そして話しやすい環境を整えることが何より大切だといいます。

一見、活動には無関係な世間話がお互いの人間性を理解し、その後の信頼関係を築いていくことに役立ったりするものです。委員仲間や関係機関の職員、社協協力員、住民……顔と顔をあわせた人間関係ができていれば、ゆっくりとでも確かに前へ進んでいくものだというのが、小柴さんが長年の経験で得た信条でもあります。

地域を想う

当初、生まれ育った地域での活動とはいっても、未経験の世界へ飛び込むことに、やはり一抹の不安はあったと当時を振り返ります。

実際は、周囲の環境が整っていたこともあり、その不安は杞憂に終わりましたが、民生委員活動を始めてみて、とある感慨を覚えたといいます。

「見守り訪問などで地域を回っていると、幼少期の頃の記憶が懐かしく思い出されたり、これまでは素通りしていた路傍の草花にも目が向くようになりました」

長年、自分と家族が生活し、一番自然体でいられる場とあらためて向き合ってみると、それまで当たり前のように感じていたもの一つひとつが、何かかけがえのない大切なものを感じられるようになったといいます。

そして、委員仲間についても、「民生委員になれば、絶対に会えることがなかったはずの方達が、今では信頼する相談相手となっています」と、自分の人生を豊かにしてくれたその縁の不可思議さに思いを馳せていました。

小柴さんは、「そういうことを感じる歳になったということかな」と、笑いながら話してくれましたが、就任当時から変わらないその想いは、活動への姿勢として現れてくるものかもしれません。

山折

山折

覚えよう、話をしよう、仲良くなろう、そんな気持ちで歩き回りました。ご近所の知り合いから始まり、少しずつ活動エリアを広げながら、「何かあったら、お声をかけてくださいね」と、自らをPRして回ったのです。

ちょっとした手助けでも、「ありがとう、助かったよ」と言ってくださる方もいました。その反面、「民生委員なんだから、助けてくれるのが当たり前でしょ」といった態度で接してくる方もいて、「世の中には、いろいろな考え方の人がいるものね」と思ったものです。

これまでも、幅広く人付き合いをしてきたつもりですが、あらためて民生委員という立場で人と接するととなると、また違った一面を垣間見ることもあったのです。

一人の女性との出会い

活動を始めて半年ほど経った頃、担当区域内で一人暮らしをしている小林ハツエさんという 85 歳の女性と出会いました。

その地域の近隣の方と立ち話をしていた時、「そういえば、あそこのお宅、一人で暮らしているんだけど、足腰も弱って外出もままならなくなっているみたい」といった情報を教えてもらったのです。

取るものもとらずあえず、その近隣の方に紹介していただき、小林さんのお宅を訪ねてみました。

小林さんは一人暮らし。夫とは 5 年前に死別し、ご自身も持病のリウマチが悪化して、外出もままならなくなっていました。週に一度、ホームヘルパーには来てもらっていますが、あとは自力で生活をしたいと願っているようでした。

当初は、警戒心もあったのでしょうか。小林さんは「自分でできますから」と、なかなか心を開いてはくれませんでした。

でも、それからというもの、週に数回、買い物途中などにお宅に立ち寄り、声をかけるようにしてみました。心が氷解していくというのは、こういうことをいうのでしょうか。ひと月ほど経った頃から、「鈴木さん、いつもありがとうね」という感謝の言

葉を聞かせてくれるようになりました。私にとってかけがえのない言葉、「ありがとう」を聞けたことから、それまで以上に小林さんを気に留めるようになっていきました。

女性からの切なる願い

出会って 3 か月ほど経ったある日、小林さんから「家の中のゴミすら表に出せなくて困っている」という話を聞きました。

私は「そんなこと、私に言ってくださればいいのに」と、二つ返事で引き受け、二日に一度はゴミを出す役目を引き受けるようになりました。そんな私の姿に気をよくしたのか、小林さんは「あなたの好きなものでいいから、夕食を作ってくれない？」と、リクエストをするようになりました。料理が嫌いではない私は、時折食材を買いに出かけ、夕食を作るようにもなりました。お宅にも自由に上げられるようになり、時には一緒に夕食を食べる仲にもなっていたのです（もちろん、主人や息子が遅く帰る時に限っていましたが……）。

とある夜、もう午後 11 時をまわっていたでしょうか。私の携帯電話が鳴りました。小林さんからです。「寝付けない。少しだけでいいから話し相手になってほしい」といった内容でした。主人に断り、お宅に駆けつけました。その夜は安心してくださったのか、すぐに落ち着かれたのですが……。

その後、夜中であっても、小林さんから電話が入るようになってきたのです。私も、その都度駆けつけて、不安な気持ちでいる小林さんに寄り添うようにしたのですが、主人からは「そこまで関わらないといけませんか？」と、苦言を呈されました。

正直なところ、私も困惑し始めていたのです。何か良かれと思って行っていることが、次第に裏目になり始めているような、そんな不安がよぎるようになってきました。

(次頁へ続く)